

広島で被爆した父

私は静岡県浜松市生まれの被爆二世です。両親や親族から戦争の話聞いて育ちました。父の兄はニューギニアで戦死しています。1945年6月18日の浜松大空襲では父の生家も母の生家も全焼し、母方では2人が焼死、父の弟は爆弾で片足を失いました。

父は22歳の時、陸軍技術部見習い士官として岡山の兵器部に配属。アメリカの戦車を迎え撃つ円錐爆雷発射法の研修出張を命じられ広島へ。1945年8月5日、岡山を出発し、6日朝、爆心地から1・2キロの広島

## 〈21〉 父の思いを引き継いで

城内の兵器部で15人の見習い士官と研修開始を待っていた8時15分、原爆がさく裂しました。父は梁の隙間から逃げ出し、陸橋の下で横転した貨物車の下で黒い雨をやり過ごし、翌日、兵器部に戻ると隣にいた同僚は焼け死んでいたそうです。

「自分だけが助かってすまない。核兵器をなくすために一生を捧げる」と誓った父は、その後結婚し、3人の娘も生まれました。父は高校の数学教師をやりながら、1959年に「静岡県原水爆被害者の会」を創立。被爆者援護法と核兵器廃絶を掲げて46年間会長を務めました。

放射能の人体への影響についても、いちばん真実を知りたいのは被爆者と二世だと思います。父は「病気のたたかいは

原爆とのたたかい」と言い続けました。82歳で頸椎損傷、大腸がん、前立腺がんの手術をし、85歳で腎臓、膀胱がん、次つぎ病気を発症しました。「なんでこんなに次つぎと病気になるんだ」と診察室で叫んだ父の姿が忘れられません。

父を支え続けた母が亡くなって、2年後に父は87歳で亡くなりました。

### 健康診断、医療費助成へ

静岡の被爆二世は、被爆者と同じように春と秋の一般健診を受けることができ、県独自の事業で、がん検診も受けられます。これは被爆者の子どもへの放射能の影響を心配し、早期発見、早期治療をすすめるために父たちの世代がとりくんだ運動の成果です。東京都

と静岡県以外では実施されていません。

大阪・摂津市と吹田市、東京都と神奈川県は、被爆者と同じ11種類の医療費助成があります。二世がどこに住んでも等しく制度が受けられるよう、国に向けて声をあげていく必要があります。

### あきらめないで

広島と長崎にある放射線影響研究所は、アメリカが年間13億円、日本が19億円を共同出資し、発症した病気の追跡調査などを行っています。これを中止し、ABCC(原爆傷害調査委員会)のときからの資料すべてを民主的に公表し、内部被爆による放射線の影響の過小評価と隠れいを許さず、被爆者医療に真に役立つ研究に転換することを求めます。

アメリカが原爆使用を謝罪し、国が戦争責任を償うまで、父から託された「被爆者のタスキ」をはずせません。あきらめないで前を向いて歩いていきます。

# いま伝えたい

## 被爆者から



核兵器廃絶運動を通して20歳の誕生日に新婦人に入会した典子さん。結婚して5人の子どもを育て、お孫さんも3人に。昨年のNPPT再検討会議「ニューヨーク行動」にも参加した

静岡・磐田市 磯部典子さん(65)